



酪農×人工知能で目指す「体験型牧場」



須藤牧場

代表 須藤 晃氏 (前橋支部所属)

Q & A

▼牧場概要&自己紹介

当牧場では現在、育成牛(預託)も含めると一九一頭の牛たちがおり、中規模ですが、牛乳の生産・販売、堆肥の生産・販売を行っております。曾祖父の一头飼養から始まり、父が専業で酪農を始め、私が引き継ぎました。

特徴としては、乳酸菌入りの混合飼料を与えることで、牛の免疫力が強化され、健康でストレスのない牛乳生産を行っております。また、同友会(前橋支部)にも所属している、農事組合法人元氣ファーム20の関根氏と協力し、県産の飼料イネ・飼料ムギ、関東では初の粉末サイレージという飼料を使用しています。この取り組みは、八割以上を輸入に頼る現在の飼料を、国内、もつと言えば県内で作られた飼料に切り替えたいと進めています。

私自身は、酪農専門の大学を卒業後、酪農ヘルパーとして九年間働き、実家に戻って家業を継ぎました。何となく引き継ぎましたが「どうせやるなら儲か

る経営がしたい」と思い、勉強を続けています。

▼酪農×人工知能とは

牛たちの管理は、早い段階からパソコンを取り入れ、万歩計を使い、牛の行動量から発情を分析して行いました。最近では、牛群管理アプリケーションを利用し、牛の日々の情報をスマートフォンなどで記録・共有・分析するまでになっていきました。さらに新しい技術を取り入れました。

牛に首輪状のウェアラブル端末(加速度センサー付)を取り付けることで、牛の行動データが自動的に取得され、クラウド上に集約、人工知能が解析した



結果が管理者のスマートフォンに送られる仕組みです。ここで集められるデータは、歩数だけでなく、食べる・寝る・反芻するといった様々な生命活動です。その変化をアルゴリズムが検知することで発情行動や、疾病兆候もいち早く知ることができます。

▼ウェアラブル端末(IOT)導入の経緯

実は、牛たちの発情などの見極めは、日々の観察でも可能です。IOT導入で業務効率が劇的に改善する事はありません。

最新技術を導入した理由は、今後の牧場経営を考える上で重要な、個体毎の出生から現在までの活動状態が「全て記録」出来ることにあります。何を食べ、どんな行動をして、どういった治療を受けたのか。その全てがデータ管理出来るということからは、食品に関する「安心・安全の見える化」です。ただし、これは牛乳の話ではありません。牛乳は流通の仕組上、酪農家で搾乳、組合に集積、殺菌処理などを経て、消費者向けに流通します。酪農家からの直販では有りません。

▼今後の展望は

先述の「安心・安全の見える化」を推進し、オリジナルのチーズを生産します。牛たちの飼料から、堆肥、牛乳、そしてチーズ。人の口に入るまでの全てを繋げ、食育として繋がりの味わってもらおう。つまり「体験型牧場」が目標です。普段口にしているのがどう作られているのかを体験すれば、もつとおいしく感じるはず。元氣ファーム20で採れた小麦、当牧場のチーズを使ったピザを考えています。牛たちの飼料も含めて、オール群馬のピザも夢ではありません。



所在地 / 前橋市泉沢町190
連絡先 / TEL027-280-7020